

じつきょう

商業教育資料



アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び） の授業法と反転授業，評価

学校法人桐蔭学園理事長

桐蔭横浜大学学長・教授 溝上 慎一

1. 新学習指導要領に導入されたアクティブ・ラーニング

アクティブ・ラーニングは、1990年代初頭に米国の高等教育の中で広まり、2012年の中央教育審議会答申（いわゆる「質的転換答申」）で日本の高等教育の施策に取り入れられた概念である。これまでの講義一辺倒の授業を脱却し、書く・話す・発表する等の学生の能動的な活動を授業に組み込むことで、知識理解だけでなく、今でいうところの学生の深い学びや資質・能力（コミュニケーション力や問題解決力など）をも育てる教授学習の転換を促そうとした実践的概念である。

グループワークや発表などの活動をさせればアクティブ・ラーニングをしたことになると思える教員が少なくないが、それは正しくない。学生が頭の中にある考えや理解を自身の言葉で、書く・話す・発表する等の活動を通して「外化（アウトプット）」することが、アクティブ・ラーニングの本質的ポイントである。したがって、グループワークや発表の活動をさせても、学生が十分な外化をしなけ

れば、それは深い学びや資質・能力を育てるアクティブ・ラーニングとはならない。深い学びや資質・能力を育てるには、学生が熱心に考えたことや理解したことを書き出そう、他者に伝えようとする必要がある。これがなければ、ただ活動をさせるだけの「はいまわるアクティブ・ラーニング」となり、無駄な時間を費やすこととなる。

高等教育で導入されたアクティブ・ラーニングは、高大接続改革が進んだ2014年に高校でも導入されることとなり、学習指導要領改訂の流れに繋がった。というのも、講義一辺倒の授業は、高等教育だけでなく高校の授業においても問題とされていたものだからである。ところが、中教審の審議の過程で、アクティブ・ラーニングでは指導法を一定の型にはめ、授業の方法や技術の改善に終始する懸念が示され、2020年4月小学校より漸次実施される新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）として示された。アクティブ・ラーニングという言葉を残すことで高等教育

Contents

・アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の授業法と反転授業，評価 ----- 01

新課程 研究報告

・「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえた第4次産業革命の経済社会を担う創造的な地域職業人を育成するための学習・指導方法及び評価方法に関する研究 ----- 06

・[主体的・対話的で深い学び] × [指導と評価の一体化] ~地方創生時代を生き抜く力を育むための商業教育の在り方~ ----- 10

・新型コロナウイルス 休校対応からみえたこと ----- 16

・「商品開発」からみえた高校生が持つ可能性 ~ 2年越しの日本一を取るまで ~ ----- 20

・地域×教科「商業」×RESAS ~岡山県は果物王国なのか?~ ----- 24

主体的・対話的で深い学び

- ①**主体的な学び**：学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を繰り返して次に繋げる学び。
- ②**対話的な学び**：子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び。
- ③**深い学び**：習得・活用・探究という学びの過程のなかで、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連づけてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び。

との接続を示しつつも、主体的・対話的で深い学びを前面に打ち出しての実施となった。

私見では、用語の問題よりも、講義一辺倒の授業など行っていない義務教育関係者と、高等教育や高校で問題視されている「講義一辺倒の授業の脱却」の意義が共有できなかったことが、議論を混乱させた大きな原因ではなかったかと考えている。資質・能力の育成を前面に出して「社会に開かれた教育課程」と謳う割には、「最終的には深い学びが重要だ」という論に代表されるように、結局学習の質を通してのみの授業論に終始した嫌いもある。深い学びや学習の質を否定する教育関係者はいないはずだが、いずれにしても、このような認識のズレは、出口（卒業後）に直結して資質・能力が問題となっている高等教育関係者と、対話的な学びをある程度日常的に行ってそこは深刻な問題となっていないと見ている義務教育関係者とのズレが露呈したものだとも見える。

もっとも、アクティブ・ラーニングは講義での「聴く」受け身の学習に対するあらゆるアクティブな学び（外化）を強調するものであるが、主体的・対話的で深い学びは、生徒のアクティブな学びをいわば要素分解して説かれており、わかりやすく示されているともいえる。また、主体的・対話的で深い学びは、講義も含めた授業全般の改善の視点として説かれており（千々布、2020）、さまざまな教授活動を同時に論じる格好をとっている。さらに、高等教育ではアクティブ・ラーニングと深い学びは別概念であったが、新学習指導要領では活動主義（はいまわるアクティブ・ラーニング）に陥ることを避けるべく、「深い学び」が加えられた。深い学びを促す各教科の「見方・考え方」も示され、主体的・対話的で深い学びが活動を行い

つつも、教科内容と密接に関連して学習を深める教科活動であることも直接的に明示している。

2. アクティブ・ラーニング型授業の基本形

講義+アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の組み合わせを「アクティブ・ラーニング型授業」と呼ぼう。アクティブ・ラーニングを初めて実践しようとする方、実践したことはあるがうまくいかなかったという方には、ここで示す2つの基本形を実践してほしい（溝上、2018）。



▲ 図表1 (上) ペアワークで向き合う
(下) グループワークの形態で前を向く

*（愛知県私立）名城大学附属高校の授業（数学Ⅲ）。溝上（2018）、図表9（p.23）より

第1のポイントは、「教員と生徒の関係性」を生徒の身体性をもって確認しながら授業を作っていくことである。アクティブ・ラーニング型授業がうまくできないという教員の授業に共通して見られ

るのは、出す指示が通るだけの生徒との関係性ができていないことである。生徒との関係性を構築しながら授業を作っていくことは、アクティブ・ラーニングだけでなく、あらゆる授業を実施する上での基本である。ペアワーク、グループワーク、発表などのアクティブ・ラーニング型授業では、生徒を動機づけたり方向づけたりすることが特に求められる。

図表1の写真上は、ペアワークの場面である。生徒がお互いに身体を向け合って話し合いをするように教員から指示が出されている。そして、生徒はその指示に従っていることが、生徒の身体性から読み取れる。写真下は、グループワークの途中で教員が少し解説を入れた場面である。グループワークを行う時には、教員から見て生徒は横向きになっていることが多い。しかし、教員が前で説明する時、生徒が前に出て発表する時などは、生徒の身体を前に向けるように指示をする方が良い。この指示が通るなら、生徒はたいていアクティブ・ラーニングには熱心に取り組んでいるはずである。それならば、次の課題は、問いや学習内容を充実

させることとなる。

第2のポイントは、「個-協働-個」の学習サイクルを作り、学習を深めていくものである。図表2のワークシートを紹介しポイントを説明する。

①自分の考えをまず書くことである。ワークシートでは、①「自分の考え」を書くようになっている。いきなりグループワークを行い他の生徒の考えを聞くのではなく、自身の理解や考えをまず作ってからグループワークを行うという考えに基づいている。

②グループワークを行い、他者とのズレを見出す。そして、それをなくすべく話し合いをして、その結果をワークシートに書くことである。ワークシートでは、②「(話し合いで気づきがあったらメモをしておきましょう) 自分の考え」と書かれている。他者と話し合いをしたからこそ、グループワークをしたからこそその気づきが得られるようにしたい。

③自身の考えや理解をまとめる、振り返る。ワークシートでは、③「今日の授業を振り返り～考えてみよう」と書かれている。ここは自由に振り返りをすれば良いところだが、生徒にはできるだけ具

二年 現代文 単元 小説「水かまきり」 ③



No. 氏名

目標 「わたし(春子)」の「ケン坊」への思いを深く考察する。

①

一、おなかのあたりに満ちてくるものとは何か。
自分の考えを書き、ペアで共有してみましょう。

自分の考え
・突っ感(ほろほろするよう)な気持ち
・嬉しさい、喜び
・密かなおっぱい?

②

二、とくんとんとなるのが、なぜ「胸」ではなく、「おなかの中」なのか。
自分の考えを書き、グループで順番に話してください。
話し合いで気づきがあったらメモをしておきましょう。

自分の考え
・中央にあるので大きく広がっていくイメージがあるから。
(おっしり、じんわり)
・満ちてくるからウソから思ひが全身にいそ、渡る。

③

三、今日の授業を振り返り「おなかのあたりに満ちてくるものとは何か」考えてみよう。

・おっぱいというよりは、憧れる思いだったり、昔から変わらぬ安心感だと思ったり。それは何にもかえ、難しい、春子だけの特別な大切な思いだから、誰にも言いたくないんだと思う。

▲ 図表2 アクティブ・ラーニング型授業で使用されるワークシート

* 静岡市立高等学校の授業(現代文)。溝上(2018)の図表20(p.47)

体的に書くように指示した方が良い。「楽しかった」「いろいろ考えた」といったような、どんなワークをしても書けるような逃げ言葉にならないように指導したい。

高校や大学の授業は学習内容の多くが高度化されているので、私は技術的なことは最小限にして、教材研究や学習を深める問いの開発などに多くの時間を費やした方が良くと説いている。その立場でいえば、上記の2つの基本形をしっかりと実施するだけでも、十分質の高いアクティブ・ラーニング型授業を作っていけると考えている。アクティブ・ラーニング型授業には、細かくいえば200以上の技法があるといわれているから、さまざまな技法を学びたい方は、E. F. Barkleyら(2009)の著書を読まれるのも良いかもしれない。

3. 商業科でのアクティブ・ラーニング型授業

図表3の写真は、商業科の「広告と販売促進」の授業である。最初の3時間を使って静岡市・清水区の行政資料を読んでまとめ、静岡市観光企画課の講演を聴き、その上で「他県の人にアピールしたい『静岡市』の魅力ってなんだろう」「清水港周辺のまちづくり」という課題を与えられた生徒の作業風景である。

付箋を使って課題に対するアイデアを書き出していき、グループごとに決められたファシリテーター役を中心にKJ法を使って整理していく(写真上)。写真にはないが、グループのまとめがなされた後、他のグループのまとめを見に行き、コメントをつける、まとめの質を高めるという作業も加えられている。写真下は、グループの発表場面である。生徒は大きな声で発表しており、聞き手の生徒は傾聴姿勢をとって聴いていた。課題に対する学習内容だけでなく、話す、聴くについての態度指導も丁寧になされており、資質・能力の育成も合わせて行われていることが見て取れる授業であった。

4. アクティブ・ラーニング型授業の評価

あらゆる教育活動の起点は学習目標にある。ア



▲ 図表3 (上) 付箋・KJ法でアイデアをまとめる
(下) グループ発表

* (静岡市立) 清水桜が丘高校商業科の授業(広告と販売促進)。「溝上慎一のウェブサイト」(<http://smizok.net/education/>)で紹介。

クティブ・ラーニングは、あくまで学習目標を達成するための学習法に過ぎず、その善し悪し、出来は学習目標に照らして評価されるべきものである。自ら考えや理解を外化するアクティブ・ラーニングは、深い学びやコミュニケーション・問題解決などの資質・能力の育成を目標とする学習であるが、そのような学習目標が単元や教科の中で設定されていない場合は、アクティブ・ラーニングを行うことはナンセンスであり、その善し悪しや出来を評価しようとする必要ももちろんないということである。

その上でアクティブ・ラーニングを行う場合、とりわけ資質・能力を育成するにあたっては、授業プロセスにおける関心・意欲・態度をベースにした形成的評価が求められる(石井, 2020)。図表1, 3で示したアクティブ・ラーニング型授業で求められる態度も、この関心・意欲・態度の1つである。そして、その積み重ねの結果として、単元末・学

期学年末に、コミュニケーションや問題解決などの資質・能力の向上が総括的に評価されるのである。

もっとも、これまで形成的評価といえば、授業で示された生徒の学習結果と学習目標を照らし合わせ、その達成に向けて不十分だと思われる箇所を次の授業以降で修正するという評価活動のことであった。しかし、図表1, 3で示したような生徒の姿勢や態度は、次の授業で修正すれば良いというものではなく、その授業内での即自の指導が求められるものである。実際、図表3の授業者は、授業開始時のペアワークで元気が足りないといって、生徒にやり直しを求めた。

これまで一般的に理解されてきた形成的評価がメゾレベルのものであるとすれば、ここで説かれている形成的評価は、さらに時間スパンが短いミクロレベルの形成的評価と呼べるものである。ミクロレベルの学習プロセスを問題とするのが、アクティブ・ラーニングの、とりわけ資質・能力育成に関わる評価だともいえる（溝上, 2020）。

5. 反転授業とブレンド型学習

アクティブ・ラーニング型授業の応用的技法として「反転授業」がある。米国ではeラーニングの発展の流れで2000年頃より提唱されたものであるが、日本ではアクティブ・ラーニングの発展の流れで2010年過ぎに紹介され始めた。

反転授業とは、従来教室の中で行われていた授業内学習と、演習や課題など宿題として課される

授業外学習とを入れ替えた教授学習の様式のことである。大学や高校では、膨大な基礎知識を教えなければならず、アクティブ・ラーニングの時間がとれないと悲鳴を上げていた数学や理科などで多く取り組まれてきた。

知識伝達の部分を予習（授業外学習）として自宅でオンデマンド教材を通して学び、対面の授業では、生徒同士でわからなかったところを教えあったり問題演習に取り組んだりすることで、深い学びや資質・能力を育てる時間とすることができる。図表1も反転授業としてのアクティブ・ラーニング型授業の実践例である。写真上は、予習で学んだことをペアワークで説明し合っている場面である。

反転授業は日本で紹介され始めて10年近くになるが、多くの教員にとってオンデマンド教材を作成する技術的ハードルが高く、なかなか取り組みが一般化しなかった。しかしながら、2020年の新型コロナウイルス感染拡大防止対策の中でオンライン授業が全国的に一般化し、このハードルが一気に下がった。

もっとも、オンライン授業の全国的実施は、対面でしかできない授業の意義を見直す契機ともなり、対面でなくても良い学習はオンライン学習として取り組まれれば良いという議論もなされている。対面授業を前提とした反転授業は残っていくだろうが、他方で、対面学習+オンライン学習としての「ブレンド型学習」の一形態として発展的に取り扱われていくことも予想される。

参考文献

E. F. Barkley 他 (著) 安永悟 (監訳) 2009 協同学習の技法—大学教育の手引き— ナカニシヤ出版

千々布敏弥 2020「主体的・対話的で深い学び」ってなんだ？ 教職研修 2020年4月号 p.52-54 株式会社教育開発研究所

石井英真 2020 授業づくりの深め方—「よい授業」をデザインするための5つのツボ— ミネルヴァ書房

溝上慎一 2018 アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性 東信堂

溝上慎一 2020 社会に生きる個性—自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー— 東信堂

*理論や概念の最新の説明は、Web サイト「溝上慎一の教育論」にもあります。また、本稿で紹介した高校の商業科や社会科のアクティブ・ラーニング型授業の実践事例も紹介しています。あわせてお読みください。

Web サイトはこちら ▶

